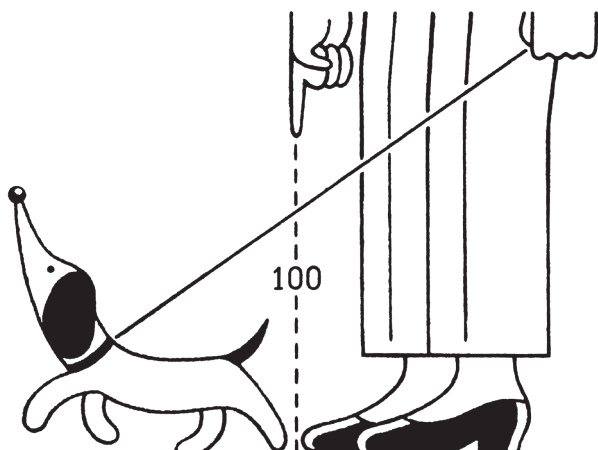
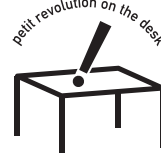


## 机の上の小さな変革



## 100歩の感覚

こんにちは、菅俊一です。今回はみなさんに色々歩き回ってもらいながら、独自の視点で世界を把握する方法について考えていきたいと思います。

それでは早速ですが、家や職場など、いまいる場所の出入り口に立ってみてください。そして、そこから出発して100歩でどこまで行けるのか、歩数を数えながら歩いてみてください。100歩も歩いていれば道の分岐に遭遇する場合もあると思うのですが、ぜひルートを1つに絞らずに、何度かルートを変えながら、自分が100歩で行ける範疇を把握してみましょう。

1日の歩数として考えると100歩は大したことないですが、実際に歩いてみると想像している以上に遠くまで行けることがわかつていきます。

何度か歩いて、自分にとっての100歩の距離感が確認できたら、今度は同じように家や職場の出入り口から出発して、1分間歩くことでどこまでたどり着けるのかチャレンジしてみてください。

こちらも可能であれば、何度かルートを変えながら、1分というわずかな時間で、どこまで移動できるのかを確認してみましょう。

## !! 実感に基づく指標を獲得しよう

今回みなさんには、歩数をわざわざ数えながら歩いた

り、1分間の制限時間を設けて歩いたりといったように、普段の目的地に向かうための歩行とは異なる試みをしてもらいました。

制限のなかでどれだけ歩けるのかというチャレンジをしてみると、自分なりの独自の身体感覚に基づいた100歩や1分間の距離感を手に入れることができます。手に入れたこの距離感が、生活を便利にするといったように直接何かの役に立つことはありませんが、周囲の環境を把握する際に、単に「80m進めた」といったような数値で測れる画一的な基準ではなく、「こんなところまで100歩で行けるんだ!」といった驚きの実感が伴った独自の感覚を持つことで、自分の身体と環境の新しい関係性やポテンシャルを知ることができます。

それは、現在の私たちの社会に溢れている、1つの数値で測れる指標を基にした、「どちらが優れているか」「コストパフォーマンスがよいか」などの相対的に優劣を決める画一的な評価とはまったく異なるものです。

あらゆる行動がデータ化され、予測に基づく「答え」が瞬時に与えられるような傾向がより強まる社会のなかで、今回のような取り組みによって得た個人の実感は、みなさんの頭のなかにしかない絶対的なものであり、決してデータ化されない情報の1つです。このような情報をどれだけ獲得できるかが、人間本来の能力や可能性を見つめるうえで、とても重要になってくるのです。 ▲

## PROFILE 菅 俊一 (SYUNICHI SUGE)

コグニティブ・デザイナー。表現研究者。映像作家。多摩美術大学美術学部統合デザイン学科准教授。1980年東京都生まれ。人間の知覚能力に基づく新しい表現を研究・開発し、様々なメディアを用いて社会に提案している。主な仕事・著書に、NHK Eテレ『2355/0655』、『観察の練習』『ヘンテコノミクス』など。